

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 7 月 23 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科
博士課程後期課程

氏 名 田中美帆



□
下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 23rd Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development 国際行動発達学会 第23回大会
公式ホームページ URL	http://www.issbd2014.com/
開催期間	2014 年 7 月 8 日 ～ 2014 年 7 月 12 日
旅行期間	2014 年 7 月 8 日 ～ 2014 年 7 月 10 日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	China Shanghai East China Normal University 中国 上海 華東師範大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	田中美帆・城仁士・齊藤誠一(神戸大学)・小花和 W. 尚子(武庫川女子大学)
発表題目 ※正式名と日本語訳	The influence of personal experiences on attitudes towards life and death among Japanese adults 個人的な経験が生と死に対する態度に与える影響：日本の成人期に着目して
補助金額	50,000 円 (内訳 航空券代および宿泊費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、国際会議等参加旅費補助金を頂き、日本心理学会ならびに関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。以下、当学会での活動内容ならびに得られた成果を報告させていただきます。

活動内容

2014年7月8日～12日にかけて、中華人民共和国・上海市・華東師範大学で開催された The 23rd Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development にポスターの第一著者として参加した。本学会 (ISSBD) は生涯を通じた人間の発達についての研究に関わる国際学会であり、2年ごとに開催される。世界60か国の研究者が所属しており、学会会場ではアジア圏からの研究者のみならず欧米圏やアフリカ圏からの研究者も多く見られ、活発な討議がなされていた。申請者は7月9日(水) 17:15-18:45に開催されたポスターセッション2でポスター発表を行った。発表題目は「The influence of personal experiences on attitudes towards life and death among Japanese adults (日本語題 個人的な経験が生と死に対する態度に与える影響：日本の成人期に着目して)」であった。今回のポスター発表は800以上の応募があり、そのうち600本のポスターが accept されている。

研究発表の成果

申請者の発表は、日本の成人期にある男女の生と死に対する態度について、個人的な経験の有無に焦点を当て検討したものである。20代～40代の312人を対象にアンケート調査を行った。その結果、それぞれの年代や性別において影響を与える個人的な経験が異なることが明らかになった。

発表時間は1時間30分であり、国内学会のように在籍時間が決まっておらず、フルセッションであった。国内学会では、死生観というテーマはまだマイナーなテーマであり、たくさんの方に途切れることなく足を運んで頂いた経験はほとんどなかった。しかし、今回の発表ではポスターを張り出してすぐにたくさんの人々が集まり、セッション終了時間まで途切れることなく活発な議論を交わすことができ、海外での関心の高さがうかがえた。特に質問が多かったのは、下位尺度の一つ「死後の生活への信念」についてであった。これは、生まれ変わり思想や死後の生活や世界の存在についての信念であるが、日本人独特の観念であるともいえ、「具体的にはどのような内容を含むのか」、「日本人が普段、先祖のことを思っているのとは違うのか」などの質問を頂いた。日本人の宗教観や信仰というのは既存の宗教にはない部分も多く、異なる文化背景を持つ人々に説明するのは非常に苦労した。また、東日本大震災の影響を懸念した質問も多く、国内学会とは切り口の異なる質問を頂き、多くの刺激を受けた。初めての国際学会であり、戸惑いながら作成したポスターをほめて頂くことも多く、今後の励みになった。

その他の発表・活動

Opening Ceremony では、本大会の keynote speaker の一人である Lindenberger Ulman 先生の発表を聞くことが出来た。生涯発達について研究する上で重要な概念や諸理論が紹介されており、改めて生涯発達の概念を振り返る良いきっかけとなった。また、自身の発表や他の研究者のポスターを聞き、英語によるプレゼンテーションの重要性や自分の気持ちを英語で伝える難しさを痛感した。現在の英語力では発表原稿まで作り上げることは可能だが、質疑応答の場面になると議論を深めることが難しかった。今後は、更なる研究の発展はもちろんのこと、英語力やプレゼンテーション能力の向上に一層の努力をしていきたい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 11 月 7 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 北海道医療大学大学院
心理科学研究科 修士 2 年

氏 名 土屋垣内 晶 

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 44th Annual Congress of the European Association for Behavioural and Cognitive Therapies (ヨーロッパ行動療法認知療法会議)
公式ホームページ URL	http://www.eabct.com/
開 催 期 間	2014 年 9 月 10 日 ～ 2014 年 9 月 13 日
旅 行 期 間	2014 年 9 月 10 日 ～ 2014 年 9 月 15 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	World Forum, Hague, Netherlands (オランダ・ハーグ・ワールドフォーラム)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	土屋垣内晶 ¹ ・黒宮健一 ¹ ・安藤孟梓 ¹ ・堀内聡 ¹ ・吉良晴子 ² ・鄧科 ³ ・津田 彰 ⁴ ・坂野雄二 ⁵ ¹ 北海道医療大学大学院心理科学研究科, ² 久留米大学大学院心理学研究科, ³ 久留米大学大学院比較文化 研究科, ⁴ 久留米大学文学部心理学科, ⁵ 北海道医療大学心理科学部
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The Co-occurring Patterns of Hoarding and Depression, and Disabilities: in a Sample of Japanese College Students. 日本人大学生における溜めこみ、抑うつ、機能障害の併存パターンについて
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 航空券代 202,640 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、ヨーロッパ行動療法認知療法会議への参加にあたりまして、日本心理学会より国際会議等参加補助金をいただきましたことを、心より厚く感謝申し上げます。学会での活動、自身の研究発表を含む、参加により得られた成果などについて報告させていただきます。

【活動内容】

報告者らは“**The Co-occurring Patterns of Hoarding and Depression, and Disabilities: in a Sample of Japanese College Students**”という演題でポスター発表を行うため、2014年9月10日から13日にかけて、オランダのデン・ハーグで開催されたヨーロッパ行動療法認知療法会議に参加した。初日はプレ・ワークショップが開催され、翌日から3日間に渡って基調講演、ラウンドテーブル、シンポジウム、口頭発表、ポスター発表などが行われた。報告者らは、11日にポスター発表を行った。

【成 果】

1. 報告者らの研究発表

発表時間中、異なる分野の研究者からも貴重な意見を頂き、有意義な議論を行うことができた。ポスター会場への全体的な人の入り、訪問者の数は期待していたほど多くはなかった。これは、在籍時間とシンポジウムが重なっていたために、前後のセッションに参加する参加者にとって、ポスターを吟味する時間があまりなかったことが原因と思われる。そのためか、訪問者には報告者と関心領域が極めて近い研究者が多かった。特に、強迫症に関心のある研究者から質問を受けることがほとんどであったが、強迫症と自閉性障害との関連に興味を持っている発達臨床分野の研究家・臨床家からもコメントをいただいた。その結果、訪問者の数はそれほど多くなかったものの、じっくりと落ち着いた議論につながり、報告者の調査に対するクリティカルなコメントや、現在進めている研究課題につながるような示唆が得られた。その他、ヨーロッパにおける関連領域の研究動向なども知ることができ、全体として意義深い発表になった。一部の訪問者とは今後も密に情報交換をしていくことを確認するなど、新たな人脈の形成にもつながった。

2. 参加した研究発表

数多くのプログラムが開催され、興味のある内容が同一の時間帯に開催されたため、どのプログラムに参加をするか迷う場面が多かった。報告者は、強迫症に関するプログラムに積極的に参加した他、近年盛んに研究が行われている **Cognitive Bias Modification (CBM)** に関するプログラムにも参加をした。CBMは、不安や抑うつに関連して生じる認知バイアスを、認知課題に取り組むことで修正し、症状の改善を図る介入法であり、基礎心理学の知見を臨床的介入に生かすものとして、報告者がかねてより関心をもっていた介入法であった。しかし、症状の改善と認知バイアスの修正との関連がクリアに示されていると感じる研究は少なく、今後の研究の発展が待たれる分野であると感じた。

また、今大会には日本からの参加者もあり、空き時間にはそれぞれの研究発表や今大会で印象に残ったプレゼンテーションなどについて意見交換をすることも多く、国際的に活躍しておられる先輩方から様々なことを教わることができたのも収穫であった。最後に、13日に行われた **Dr. Hermans** による基調講演“**The central role of learning principles is our basic postulate! Or can CBT really evolve without?**”は、ヨーロッパにおける行動療法と認知療法の関係について説くものであり、日本の現状と重ね合わせることで、認知行動療法の今後の発展について考えを深めることにつながった。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 8 月 11 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名
東北大学大学院文学研究科 博士課程前期
氏 名

立花 良



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	28th International Congress of Applied Psychology 第 28 回国際応用心理学会
公式ホームページ URL	http://www.icap2014.com/
開 催 期 間	2014 年 7 月 8 日 ～ 2014 年 7 月 13 日
旅 行 期 間	2014 年 7 月 9 日 ～ 2014 年 7 月 12 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	France, Paris, the Palais des Congrès de Paris フランス、パリ、パレ・デ・Congrès・ド・パリ
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	立花 良・行場 次朗 (東北大学大学院文学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Effect of Different Types of Misdirection on Attention and Detection of Change 変化検出における異なるミスディレクションの影響
補 助 金 額	80,000 円 (内訳: 旅費 188,349 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、申請者の学会発表に対し国際会議等参加旅費補助金を採択して頂き、心より感謝申し上げます。

以下、当該学会での活動内容および成果について報告いたします。

・活動内容

2014年7月8日から13日にパリで開催された28th International Congress of Applied Psychology (第28回国際応用心理学会)に参加し、1)ポスター発表および2)ICP2016の広報活動を行った。

1)は、10日(木)の12:00~13:00セッション内の5分間に、Applied Cognitive Psychology分野のE-poster Presentationにおいて行った。発表内容は、ミスディレクションという注意の誘導方法の種類ごとに、どのような効果の違いが生じるかについて検討した研究であった。

2)では、10日から11日の2日間、日本ブースにて、2016年7月24日から29日に横浜で開催予定のICP2016 (31st International Congress of Psychology)の広報活動に参加した。広報では、ICP2016のパンフレット配布やアンケート実施を行った。

・成果

申請者は本学会が初の国際学会発表であった。スムーズに発表はできたが、研究内容についてはポスターセッションへの参加者が少数であったため、あまり議論はできなかった。一方、日本ブースでの広報活動では、他研究者と英語におけるコミュニケーションを良く取れ、英会話の向上と情報交換を積極的に行えた。

1) 発表

申請者は、ミスディレクションという注意を誘導する技術について、その種類ごとの影響差と応用可能性について発表をした(図参照)。在席時間が5分(発表3分、質疑応答2分)と非常に短かったため、聴衆が理解しやすいよう、要点を絞って説明することに尽力した。発表は予想よりもスムーズにできたが、質疑応答では他研究者と議論ができなかった。その理由として、質疑応答時間の短さ、聴衆の少なさが挙げられる。本学会ではポスター発表だけでも1,050件あり、1人1人の発表時間が非常に短かった。また、発表時間が短いためか、発表時間に在席する発表者が少なく、発表時間が大幅に繰り上げられた。これにより、発表セッション間で予定された発表時間が大きく変わり、興味のある研究発表を聞きに行くと、すでに終了している事態が多く見受けられた。申請者の発表も1時間近く繰り上げられ、聴衆も少なく、良い議論ができなかった。



図. 申請者の研究発表の様子。

これを受け、発表者全員が他研究者と議論ができるような学会運営の参考になった。

2) 広報活動

学会会場の日本ブースにて実施されたICP2016 (31st International Congress of Psychology)の広報活動に参加し、積極的に英語でのコミュニケーションを取り、非常に良い経験を積むことができた。

先述の通り、本学会発表が申請者にとって初めての国際学会発表であった。そのため、英語での広報活動に不安があった。しかし、広報をするにつれ英語にも慣れ、広報に限らず研究についても話を広げることができた。日本で開催予定のICP2016の広報活動を十分にすると同時に、今後の研究発表等に必要な英語でのわかりやすい説明方法を養えた。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015 年 3 月 6 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院人間総合科学研究科
心理学専攻 博士後期課程 2 年
氏 名 市川 玲子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology 第 16 回パーソナリティ・社会心理学会
公式ホームページ URL	http://spspmeeting.org/2015/General-Info.aspx
開 催 期 間	2015 年 2 月 26 日 ～ 2015 年 2 月 28 日
旅 行 期 間	2015 年 2 月 25 日 ～ 2015 年 3 月 3 日 (※航空券の関係で、申請時より変更がありました。)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	USA, California, Long Beach Convention and Entertainment Center (アメリカ・カリフォルニア・ロングビーチ会議場)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	市川 玲子 ¹ ・村上 達也 ² (¹ 筑波大学大学院人間総合科学研究科・ ² 筑波大学人間系)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Overlaps among personality disorders, and their relationships with depression: Employing a cross-lagged effects model. (パーソナリティ障害間の重なりおよび抑うつとの関連： 交差遅延効果モデルによる検討) (※校閲を経た為、申請時より変更がありました。)
補 助 金 額	80,000 円 (内訳：航空費 115,180 円の一部として使用)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、公益社団法人日本心理学会より国際会議等参加旅費補助金制度による助成を受け、The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology に参加し、ポスター発表を行いました。記して感謝し、以下のように報告いたします。

1. 学会概要

本学会は、パーソナリティ心理学および社会心理学に関する世界最大規模の学会であり、会期中は各種シンポジウムおよびポスター発表が行われた。ポスター発表は40以上の領域に分かれており、社会心理学分野の研究発表が比較的多く見受けられた。総発表数は2,000件以上に上り、世界中から参加した幅広い領域の研究者らが情報交換し、議論を交わしていた。

2. 自身の研究発表について

2月27日の18:15～19:45にポスター発表を行った。発表題目は「Overlaps among personality disorders, and their relationships with depression: Employing a cross-lagged effects model (邦訳：パーソナリティ障害間の重なりおよび抑うつとの関連：交差遅延効果モデルによる検討)」であった。今回の発表内容は、大学生230名を対象とした縦断調査の結果をまとめたものであり、境界性・自己愛性・演技性・依存性・回避性パーソナリティ障害と抑うつとの間のoverlapについて、因果関係の観点から検討したものである。

セッション中は、国内外の研究者がポスターを訪れ、臨床心理学やパーソナリティ心理学の観点から有意義な議論を行った。これまでに自身が発表した論文の内容も含めて議論を行い、パーソナリティ障害の概念整理や臨床現場における応用可能性について、考えを深めるきっかけとなった。特に、今後のDSMにおける診断基準の改訂について意見を交わしたことは、後続の研究への良い刺激となった。ポスターに掲載した情報量の少なさから口頭での補足説明の比重が増し、議論の導入が多少困難になる場面もあったため、ポスターのデザインや発表方法において改善の余地を感じた。セッション時間外にも、発表内容について、国内外の研究者らと議論を交わし、様々な観点からの有益な示唆を得た。

3. 学会参加状況

パーソナリティ障害や、パーソナリティの変化および評価に関するポスター発表を中心に聴講した。本邦では見られないアプローチや研究トピックも多く、今後文化差などに着目して自身の研究に取り入れることも視野に入れながら発表者と議論を行った。この他にも、社会心理学の関心領域のポスター発表を聴講し、知識を深めた。

また、世界規模の学会に初めて参加し、このような機会が最新の研究動向を知って今後の研究の方向性を考える良いきっかけとなることを実感した。今後も可能な限り国際会議に参加し、自身の研究成果の発表だけでなく、幅広い知見を吸収していきたいと考えるに至った。そのためにも、日頃から国内外の研究動向を追い、自身の研究を発展させるとともに、英語によるより円滑なコミュニケーションを可能にすべく精進したいと感じた。

今回得た貴重な経験を今後の研究活動に役立て、今後も積極的かつ有益な研究発表を行って参ります。この度は誠にありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 7 月 28 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名

名古屋大学大学院教育発達科学研究科
博士課程後期課程

氏 名

二村 郁美



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 28th International Congress of Applied Psychology 第 28 回国際応用心理学会
公式ホームページ URL	http://www.icap2014.com/
開 催 期 間	2014 年 7 月 8 日 ～ 2014 年 7 月 13 日
旅 行 期 間	2014 年 7 月 7 日 ～ 2014 年 7 月 15 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	France, Paris, the Palais des Congrès フランス, パリ, パレ・デ・Congrès
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	二村郁美 (名古屋大学大学院)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	A qualitative examination of inhibitive effect of bystanders' attention on prosocial behavior of Japanese people 傍観者による注目が向社会的行動に及ぼす抑制効果の質的検討
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 航空券代 157,480 円の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、第28回国際応用心理学会への参加にあたりまして、国際会議等参加旅費補助金に採択いただき、誠にありがとうございます。日本心理学会、学会関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。以下に、本学会での活動内容ならびにその成果について、ご報告させていただきます。

【大会概要】

第28回国際応用心理学会は、2014年7月8日から7月13日にかけて、フランスのパリにて開催された。本大会では、産業組織心理学や教育・学校心理学、経済心理学などを含む18のdivisionがあり、シンポジウムや発表の内容は多岐にわたっていた。

【成果】

1. 自身の研究発表について

報告者の発表は、大会2日目にあたる7月9日の12時30分から13時30分のセッションに行われた。本大会のポスター発表はe-posterという形式で行われた。発表資料は、パワーポイントで作成し、事前にアップロードをする形式であった。発表前日に、会場のプレビュールームにて、自分の発表資料に問題がないか確認する作業を行った。当日は1人あたり発表3分＋質疑2分の計5分間が与えられ、1人ずつ指定された発表ブースにおいて、口頭で発表を行った。本大会では、e-posterとbrief oralが同じ手続き・形式で行われた。報告者の発表予定時刻は12時55分からであり、発表はほぼ定刻通りに開始した。各ブースに集まっていた人の数は、時間帯や内容などによって変動していたが、報告者の発表時には比較的多くの方がブースに集まってくださり、15人ほどの方々に発表を聞いていただくことができた。

2. 他の研究発表

本大会では、非常に幅広い領域の発表が行われていたため、報告者の研究テーマに近い領域の発表から、普段なかなか触れる機会のない領域の発表まで、多様な研究知見を学ぶことができた。報告者の研究テーマに近い領域の発表としては、共感とボランティア活動の関連を検討した研究や、他者の援助の必要性を知覚する能力の発達に関する研究、本大会で報告者が発表した研究で使用方法である半構造化面接を用いた研究などの発表を聞くことができた。また、その他の領域の発表としては、感情知能に関する研究、時間的展望に関する研究、自己効力感に関する研究などの発表を聞き、様々な領域の最新の知見を学ぶことができた。

3. ICP2016の広報

会場内には、2年後に横浜で開催されるICP2016の広報のためのブースが設けられており、実行委員会の先生方を中心とした広報活動が行われていた。報告者もごく一部ではあるが、活動に参加させていただいた。ブースでは、会場にいらっしゃっている方々にICP2016の情報をお伝えするとともに、ICP2016への参加予定などを尋ねる短いアンケートに答えていただく活動を行った。多数の方にアンケートにお答えいただくことができ、ICP2016に興味を持っていただくことができた。国内外の多くの研究者の方々とお話させていただくことができ、報告者にとって大変貴重な経験となった。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 9 月 8 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士前期課程 2 年

氏 名 金井 雅仁



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	International Association for Cross-Cultural Psychology (国際比較文化心理学会)
公式ホームページ URL	http://www.iaccp2014.com/
開 催 期 間	2014 年 7 月 15 日 ～ 2014 年 7 月 19 日
旅 行 期 間	2014 年 7 月 15 日 ～ 2014 年 7 月 21 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	France, Reims, Université de Reims Champagne-Ardenne (フランス, ランス, ランス・シャンパーニュアルデンヌ大学)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	金井雅仁 (筑波大学大学院人間総合科学研究科) 湯川進太郎 (筑波大学人間系)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Experimental Examination of the Relationship between Cultural Self-construal and Bodily Sensation (文化的自己観と身体感覚の関係に関する実験的検討)
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動内容】

2014年7月15日から7月19日にかけて、フランスのランスで開催された International Association for Cross-Cultural Psychology において、口頭発表を行った。申請者の発表セッションは7月18日の9:30~11:00であり、発表題目は“Experimental Examination of the Relationship between Cultural Self-construal and Bodily Sensation（日本語題目：文化的自己観と身体感覚の関係に関する実験的検討）”であった。本学会は、心理学領域で比較文化的研究を行う諸外国の研究者が集い、知見の発表・情報交換・交流を行う国際学会である。比較的大きな規模の学会であり、今大会でも1時間~1時間半程度のシンポジウムが65件、口頭発表が429件、ポスター発表が124件行われた。Cross-Culturalという言葉にふさわしく、様々な文化圏の人々が参加し、研究発表の場や休憩時間にも活発な議論・会話が交わされていた。

【成果】

1. 自身の研究発表

申請者の発表内容は、日本人学生を対象とし、文化的自己観（相互独立的自己観 / 相互協調的自己観）の個人差により、ネガティブ感情喚起時の身体感覚の知覚のされ方や生理反応の変化に違いがあるかを実験的に検討したものである。フロアからは、①ネガティブ感情喚起のためにどのような手続きを行ったのか、②東洋的な自己観を持つ人でも他者の感情の認識は出来るのではないか、という2つの質問がなされた。2つ目の質問に関しては、自身の発表の内容とどのように関連するのかが読み取れず、質問者の質問意図を踏まえた上での議論を交わすことができなかった。プレゼンテーションに関しては、準備を重ねていったため大きな問題はなく終了したが、その後のディスカッションで満足いく対応をすることができなかった点が反省点である。今回の参加は International Association for Cross-Cultural Psychology への初めての参加であったが、今後この領域で優れた研究を重ねてゆくためには、英語でのコミュニケーション能力が必須であると身にしみて感じた。

2. 他の研究発表および研究発表以外の時間

他の研究発表の内容としては、ステレオタイプや差別といった社会心理学的なテーマに限らず、子どもの発達・教育を扱ったもの、精神的健康を扱ったものなど、実に多様であった。全発表に共通しているのは、文化的な要因との関連を検討したり、文化による違いを検討したりしているという点であると推測される。申請者は、Culture and emotion というセッションに主に参加した。そこでは、現在の自分の英語能力でどの程度発表内容を理解できるかを試してみるため、プレゼンテーション・ディスカッションを集中して聞くことに専念した。しかし、完全に内容を把握することは難しく、ここでも自身の英語能力の不十分さを痛感した。

研究発表以外の時間（休憩時間など）でも、様々な国の参加者が垣根なく会話を交わしていた。参加者を観察していると、同国の参加者同士で会話しているグループの方が少ないほどであった。今回、なかなかその輪に加わることができなかったのも反省点である。今後は、言語能力に加え、たとえ聞き取れないような英語の会話が交わされている中であっても、果敢に加わっていく積極性を見に付けたいと思う。

【最後に】

この度は、申請者の発表に対し国際会議等参加旅費補助金をいただき、まことにありがとうございます。今回の国際学会参加を通して、感じ考えたことを今後の研究生生活に活かしてゆく所存です。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 7 月 31 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 立教大学大学院現代心理学研究科心理学専攻
博士課程前期課程
(現所属先 千葉大学大学院工学研究科デザイン科学専攻
博士課程後期課程 1 年)

氏 名 向井 志緒子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	Kansei Engineering & Emotion Research International Conference 2014 感性工学・感情研究国際会議 2014
公式ホームページ URL	http://keer2014.iei.liu.se
開 催 期 間	2014 年 6 月 10 日 ～ 2014 年 6 月 13 日
旅 行 期 間	2014 年 6 月 9 日 ～ 2014 年 6 月 14 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Linköping University in Linköping, Sweden. (スウェーデン, リンシェーピン, リンシェーピン大学)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	向井 志緒子 (立教大学現代心理学研究科心理学専攻)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Analysis of Common Cognition of Impression Among Japanese Fonts and Tea Beverage Packaging (和文書体フォントとお茶飲料パッケージへの印象に関する共通した認知と個人差の分析)
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 航空券代 133,210 円の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、Kansei Engineering & Emotion Research International Conference 2014 への参加・発表に当たりまして、日本心理学会より国際会議等参加費補助金をいただきましたことを、心より厚く感謝申し上げます。以下に、学会での活動、研究発表を含む、参加により得られた成果などについて報告させていただきます。

【活動内容】

報告者は、"Analysis of Common Cognition of Impression Among Japanese Fonts and Tea Beverage Packaging (和文書体フォントとお茶飲料パッケージへの印象に関する共通した認知と個人差の分析)"という演題で口頭発表を行うため、2014年6月10日から13日にかけて、スウェーデンのリンシェーピングに位置するリンシェーピング大学で開催された Kansei Engineering & Emotion Research International Conference 2014 に参加した。日本を9日の午後に出発し、同日深夜にリンシェーピングに到着した。6月11日(会議1日目)、朝より多数の参加者・発表者でにぎわい、感性工学の分野に多くの人の関心が集まっていることを実感した。6月12日(会議2日目)の夕方はカンファレンス・ディナーに参加し、国内外の研究者と研究について多くの議論を交わすことが出来、大変充実した時間となった。報告者は、6月13日(会議3日目)に口頭発表を行った。

【成果】

1. 報告者の研究発表

自身の発表内容は、商品パッケージに含まれる要素同士(商品画像、ロゴ、色彩)が類似していると消費者による評価が上がるという先行研究に基づき、新たな類似性評価方法を提案するために、特にパッケージデザインとフォントの印象を取り上げ、その類似性について検討したものである。調査では、大学生228名、社会人75名に対し、お茶飲料パッケージ、フォントそれぞれ4種について、「陽気な－陰気な」「積極的な－消極的な」などの形容詞を用いて(SD法)評価を求めた。評価得点を分析した結果、お茶飲料パッケージおよび、フォントの因子構造が類似していたことから、両者の印象には類似性が認められ、類似度(高群・低群)による分類と、類似性による効果を検討出来る可能性を示唆した。

発表は15分、質疑応答5分であった。参加者より、刺激の呈示方法に関する質問やアドバイスを受け、今後の研究に関する改善点を得ることが出来た。英語力の不足は自覚したものの、同じ領域の研究者と意見交換をすることは大変有意義な機会であり、今後の国際会議への士気が高まった。

2. 他の研究発表

会議全体における発表数は口頭発表124件(16分野)、招待講演3件、ワークショップ2件と非常に多岐に渡る内容であった。招待講演は最終日まで計3回開催され、感性工学を製品開発や教育、デザインへ活用する具体的な提案など、非常に興味深い内容であった。特に会議前日(6月10日)に行われたワークショップは午前・午後の部と長時間に渡り、非常に密度の濃い時間であった。午前は、企業でも活用されている Kansei Engineering Software (KESo)の紹介の他、5～6名のグループに分かれて感性評価プロセスの体験および、ソフトウェアの使い方をシュミレーションし、他国の研究者たちと和気藹々としながらワークショップに参加することが出来た。昼食はワークショップ主催者の招待により講師の先生とご一緒させていただき、同領域の研究者達と情報交換や議論をするなど、交流を深めることができた。午後の部では感情と時間価値に関するワークショップが行われ、終日、学びのために集中することが出来た。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 10 月 22 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 九州大学大学院人間環境学府

氏 名 長 潔容江



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	Twenty-third Biennial Congress of the International Association of Empirical Aesthetics 第 23 回国際経験美学学会
公式ホームページ URL	http://iaea2014.weebly.com
開 催 期 間	2014 年 8 月 22 日 ～ 2014 年 8 月 24 日 (3 日間)
旅 行 期 間	2014 年 8 月 21 日 ～ 2014 年 8 月 27 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Hunter College of the City University of New York, Manhattan, New York, NY 10065 ハンター カレッジ オブ ザ シティ ユニヴァーシティ オブ ニューヨーク, マンハッタン, ニュー・ヨーク, NY 10065
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	長潔容江 ¹ ・原口雅浩 ² ¹ 九州大学大学院人間環境学府・ ² 久留米大学文学部
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Order in Paintings and Aesthetic Evaluations 絵画の秩序と美的評価
補 助 金 額	80,000 円 (内 航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【大会概要】

Twenty-third Biennial Congress of the International Association of Empirical Aesthetics (国際経験美学学会, 以下 IAEA) は, 2014 年 8 月 22 日から 8 月 24 日の 3 日間にわたって, ニュー・ヨークで開催された。口頭発表, ポスター発表, シンポジウムに加えて, Art Exhibition Presentations という, 芸術を扱う IAEA ならではのセッションもあり, 実にバラエティーに富んだ学会であった。

【研究発表】

申請者は, 8 月 24 日に行われた Poster Talks というセッションでポスター発表を行った。研究の発表は, 短い口頭発表 (5 分間) および通常のポスター発表の 2 回に渡って行われた。まず, 10:45-11:45 の時間帯に教室の一室で, パワーポイント等で作成したポスターを前方のスクリーンに投影し, プレゼンテーションを行った。次に, 11:45-14:00 の間のランチタイムでは, 渡り廊下にポスターを掲示し, 発表を行った。

発表した研究の内容は, 絵画の秩序性と評価の関係を検討し, 秩序性から美しさなどの絵画評価を予測することを試みるものであった。研究では, 多様な西洋の絵画を刺激として選定し, これまであまり定義されてこなかった絵画の秩序性に焦点を当て, 構成要素について検討した。分析の結果, 秩序性は規則性および複雑性の 2 軸から構成されることが分かった。さらに, 絵画の秩序性と評価の関係を検討した結果, 中庸な秩序性がある絵画が最も評価が高いという予測式が得られた。

始めに, 簡単な口頭発表を行ったことで, さまざまな国の研究者の方に, 自身の研究を聞いてもらえる貴重な機会が得られた。同じセッションの中には, 申請者の研究結果とは異なる知見を主張しているものもあり, この点についてお互いの意見をディスカッションすることができた。とは言うものの, 上手く自分の考えを英語で伝えることができない場面が多々あったので, 今後も英語を学びつつ積極的に国際会議で発表していきたい。

【その他の活動内容】

IAEA の学会が芸術と美がテーマということもあり, 研究を進める際に読んできた論文の著者である研究者達の研究発表を間近で聞くことができた。国際会議への参加が初体験だった申請者にとって, ウィットに富んだ発表に笑いに包まれた会場は, とても新鮮であった。とてもリラックスした雰囲気では, 上はベテランの研究者から, 下は研究グループの一員として参加していた中学生までが自由に考えを述べ合う様子がとても印象的だった。また, 発表やディスカッションを通して, 芸術の美と科学という二つの壁または繋がりについて, 多くのことを学ぶことができた。

大会 1 日目および 2 日目には, 研究発表の他に, Coffee Break や Catered Lunch の時間が設けられていた。飲み物や食べ物を囲んで, 普段はめったに話す機会がない海外の研究者とお話することができて, とても光栄だった。互いの研究テーマの話に加えて, 日本の話や趣味についておしゃべりし, とても楽しい時間を過ごした。

また, 学会での活動以外として, ニュー・ヨークの観光名所でもあるメトロポリタン美術館や近代美術館などの美術館を訪れた。さまざまな美術作品, とくにアメリカの芸術に触れる良い経験となった。

【付記】

このたびは, 申請者の研究発表に対し国際会議の参加旅費を補助していただき, 日本心理学会関係者の皆様に心より御礼申し上げます。今回の学会で得たことを, 今後の研究に活かしていきたいと思います。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015 年 2 月 29 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
博士後期課程

氏 名 佐藤 有紀



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 16 th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology パーソナリティ・社会心理学会第 16 回大会
公式ホームページ URL	http://spspmeeting.org/2015/General-Info.aspx
開 催 期 間	2015 年 2 月 26 日 ～ 2015 年 2 月 28 日
旅 行 期 間	2015 年 2 月 24 日 ～ 2015 年 3 月 2 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	USA, Long Beach, Convention & Entertainment Center アメリカ, ロングビーチ, コンベンション&エンターテイメントセンター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	佐藤有紀・五十嵐祐 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Employee Regulatory Focus and Objectives in the Workplace (従業員の制御焦点と職務目標)
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 航空運賃)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2015年2月26~28日にかけてアメリカのカリフォルニア州ロングビーチで開催された、The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (SPSP)に参加した。SPSPはパーソナリティ心理学と社会心理学における最大規模の学会組織であり、現在5500名以上の会員が所属している。大会は研究領域ごとのプレカンファレンスや、ポスターセッション、各種シンポジウム等から構成され、就職や論文執筆といった研究者のキャリアを議論するセッションも設けられている。

【発表内容】

報告者は28日の13:30より開催されたポスターセッションにて、90分間の発表を行った。発表題目は「Employee Regulatory Focus and Objectives in the Workplace（従業員の制御焦点と職務目標）」であり、日本人従業員の自己制御指針である制御焦点と、職場で各従業員に課されている職務上の目標の関係を検討した。制御焦点は情報処理スタイルや時間的展望、協力行動など様々な行動特性に影響を与えることが示されており、職務に適した制御焦点を従業員に喚起させることは職務遂行の効率化において重要と考えられる。しかし、これまで従業員の制御焦点を決定する環境要因について実証的に研究されたことはなかった。分析の結果、目標達成に関して従業員を強く動機づけるような風土をもつ企業組織においてのみ、従業員が職務目標の指針に合致した制御焦点を活性化させることが示唆された。

ポスターには比較的多くのオーディエンスが立ち寄ってくれた。しかし、制御焦点という概念になじみのない者が多く、毎度その説明に時間を割かれ、一人一人と深い議論をすることはほとんどかなわなかった。指摘としては、今回の研究では非常に限定的な変数を用いているため、従業員の職務満足等ベースとなる変数との関係などを含め概観したいという意見を受けた。総括すると、研究の必然性や立ち位置のアピールが不足していることが大きな問題であると感じた。英語のコミュニケーションに不安を感じていたが、特に問題は生じなかった。

【その他の活動】

初日はJudgment and Decision Makingのプレカンファレンスに参加した。向社会的行動における利己的動機や子どもの向社会性、経済的剥奪の影響といった幅広い観点から意思決定研究が紹介された。自身は「Regulatory focus and cooperation: Choices in a hypothetical prisoner's dilemma situation（制御焦点と協力：囚人のジレンマ状況における意思決定）」の題目でランチタイムのポスターセッションに参加した。この発表では、ロスフレーミングの社会的ジレンマ状況における意思決定に、アクターの制御焦点が影響を及ぼすことを発表した。

ポスターセッションでは自身と同じ産業・組織心理領域の研究者との議論を交わすことができた。他の領域と比べると、伝統的な変数を用いる研究が多く、方法論的にもあまり冒険しない傾向がある。産業・組織心理は古い研究領域だが、今後いかに新しい研究パラダイムを適用してゆけるかは重要であると思う。

シンポジウムでは、各領域の最新の研究成果をはじめ、社会心理学におけるビッグデータの活用手法が多く紹介されていた。特にFacebookやtwitterの投稿データを用いた行動・心理的特性の予測は普及しつつある。また、Google社やFacebook社所属の研究者が、企業研究者としてのキャリアを紹介するセッションが設けられていたのは興味深く、大規模な学会ならではの問題意識を感じた。

【最後に】

今回の国際学会への参加にあたり、参加費の補助をいただき、貴重な体験をさせていただきましたことを、深く感謝いたします。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015 年 3 月 30 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院・修士課程 2 年

氏 名 櫻井 良祐



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	International Conference on Education, Psychology and Society 教育学・心理学・社会に関する国際会議
公式ホームページ URL	http://www.icepas.org/Index.asp
開 催 期 間	2014 年 4 月 11 日 ～ 2014 年 4 月 12 日
旅 行 期 間	2014 年 4 月 11 日 ～ 2014 年 4 月 14 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Thailand, Bangkok, Landmark Bangkok Hotel タイ・バンコク・ランドマークバンコクホテル
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	櫻井 良祐 ¹ ・渡辺 匠 ^{1,2} ・唐沢 かおり ¹ 1. 東京大学大学院人文社会系研究科 2. 日本学術振興会
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Unconscious Goal Activation Occupies Executive Functions: Subliminal Priming of the Graphic Stimulus 目標の非意識的な活性化による実行機能の占有：画像刺激を用いた関下プライミング
補 助 金 額	50,000 円 (内訳 羽田ーバンコク間の航空券代 77,410 円の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【大会概要】

2014年4月11日～4月12日にかけてタイ・バンコクにおいて開催された International Conference on Education, Psychology and Society（教育学・心理学・社会に関する国際会議）に参加し、ポスター発表をおこなった。本大会は、International Symposium on Business and Social Sciences（ビジネスと社会学に関する国際シンポジウム）と同時に開催されており、心理学のみならず、教育学、社会学、経営学、政治学といった多様な領域の研究者が参加していた。

【発表内容】

申請者は、目標の非意識的な活性化が実行機能を占有するかどうかを、プライミングパラダイムを用いて検証した。具体的には、はじめにアナグラム課題とストーリー課題という2つのことなる課題を順に実施すると教示した。アナグラム課題は呈示された文字列から有意味な単語をできるだけ多くつくる課題であり、ストーリー課題は呈示された画像からできるだけ独創的なストーリーを1つつくる課題であった。その後、プライミングあり条件では、アナグラム課題を実施している最中に、ストーリー課題で用いる画像を関下プライミングした。他方、プライミングなし条件では、ストーリー課題とは無関連な画像を関下プライミングした。結果、アナグラム課題における単位時間あたりの正答数は、プライミングあり条件の方が、プライミングなし条件よりも有意に少なかった。実行機能の処理容量が有限であることと、アナグラム課題の遂行に実行機能を必要であることから、本研究によって、目標の非意識的な活性化が実行機能を占有したことが明らかにされた。

発表においては、2名の研究者が質問に訪れた。いずれも心理学を専門とする研究者ではなく、実験の内容を理解してもらうのに苦労したが、有意義な議論をおこなうことができた。

このような貴重な機会を頂いたことを心より感謝申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 9 月 16 日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士後期課程 3 年

氏 名 LIN Shuzhen



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	28th International Congress of Applied Psychology 第 28 回国際応用心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icap2014.com/
開 催 期 間	2014 年 7 月 8 日 ～ 2014 年 7 月 13 日
旅 行 期 間	2014 年 7 月 5 日 ～ 2014 年 7 月 18 日 (申請書では旅行期間は 7 月 5 日 ～ 7 月 16 日でした)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	France, Paris, Palais des Congrès フランス共和国, パリ, パレ・デ・コングレ
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	LIN Shuzhen (筑波大学) 吉田 甫 (立命館大学)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Psychosocial effects of cognitive training activity on community-dwelling older adults: a comparison between first-timer participants and participants with prior participation experience 在宅高齢者を対象にした音読・計算活動の心理社会的影響について ～初参加者と参加経験者との比較～
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 東京ーパリ間の航空代 155,730 円の一部 1 として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【謝辞】

この度、フランス共和国で開催された The 28th International Congress of Applied Psychology への参加に対し、日本心理学会より国際会議等参加費補助金を頂きまして、心より厚く感謝申し上げます。大会での活動内容、および参加により得られた成果などについて報告させていただきます。

【申請書に記した事項の相違事項】

申請書に記載した旅行期間は 7 月 5 日から 7 月 16 日であったが、航空券購入時の都合により実際の旅行期間は 2014 年 7 月 5 日から 2014 年 7 月 18 日までとなった。

【活動内容】

「Psychosocial effects of cognitive training activity on community-dwelling older adults: a comparison between first-timer participants and participants with prior participation experience」という題名で E ポスターという形式で研究発表を行うため、7 月 8 日から 7 月 13 日にかけて、フランス共和国で開催された The 28th International Congress of Applied Psychology に参加した。今回の会議ではおよそ 100 カ国から 4,500 名参加者が集まり、全参加者数において、フランス共和国・オーストラリア連邦・アメリカ合衆国に次いで、日本からの参加者は 4 番目に多かった。

初日の 7 月 8 日は会議の開会式が行われ、残りの 5 日間は分野の Division (部会) に分かれ講演・シンポジウム・ポスター発表が行われ、7 月 13 日の閉会式で会議の幕を下ろした。会議参加者のみ参加可能なプログラムの一部として、6 種類のフランスにおける心理学の重要な施設見学研修ツアーが設けられていた。

報告者は 1 日目開会式に出席し、2 日目第 7 部会ー応用老年心理学のシンポジウムと第 6 部会ー臨床心理学と地域心理学の基調講演に参加した。3 日目である 7 月 10 日、午前は上述の E ポスター発表を行い、午後は見学研修ツアーの中の一つ、フランス心理学者ビネーが使用した研究施設や生活を送った地域の散策研修ツアーに、夜は学会主催の懇親会に参加した。4 日目と 5 日目 E ポスターと書籍の閲覧、および企業出展のブースの見学をした。6 日目第 7 部会ー応用老年心理学のシンポジウムと閉会式に参加した。

【得られた成果】

報告者の研究発表では、E ポスターという形式で在宅高齢者を対象にした音読・計算活動の心理社会的影響について口頭発表を行い、日本における高齢者の心理社会面を改善するための取組および成果を報告した。短い発表時間中、日本からの研究者を始め、海外の研究者からの質問および研究成果についての意見を多く受け、今後の研究方向と研究方法について有益な示唆が得られた。また、質疑応答の時間中、報告者とポスターに足を運んだ 10 名の研究者同士と活発に意見交換と情報交換が行われ、活発な討論となった。こうした発表形式はこれまでに経験がないものであったため、非常に新鮮でかつ刺激的なものであり、プレゼンテーションに関する大変貴重な実践の機会ともなった。

他の研究発表に関しては、高齢者を対象にした各国の研究発表からアメリカ、ヨーロッパ、アジアの異なる研究動向と関心を知ることができ、また、日本の研究者はシンポジウムおよびポスター発表における発表と質疑応答と議論の時の活躍様子から学ぶ機会を得た。国際大会に参加する意義も、研究者同士の情報交換、研究成果の共有、および他国との共同研究の重要性も再確認できた。今後、研究を継続することも、国内大会に限らず国際会議においても積極的に発表することも目標にしたい。

研究発表では、研究内容を中心に意見交換と議論が行われたが、研修ツアーや学会主催の懇親会では、他国の研究者と気楽に交流できる場となり、研究に関する情報交換はもちろん、海外の研究機関の実態や生活習慣についても情報交換することができた。今回の会議参加で、他国の若手研究者と懇親を深めることが出来て、ソーシャルプログラムにも積極的参加する意義を実感した。他国の研究者と上手に交流できるように、研究の専門用語以外の語学にも励みたいと思う。

【最後に】

閉会式において「ICAP 2014 Declaration for the United Nations' Sustainable Development Goals for 2015-2030」という、心理学者の人々の身体的・精神的・社会的健康を維持することに貢献する声明が発表され、心理学者の一員としての責任感と使命感を強く感じた。今後は研究や社会的な貢献活動などにもさらに積極的に取り組む所存である。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 11 月 26 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士後期課程心理学専攻 3 年

氏 名 中野 詩織



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	clinical CHEMOSENSATION 2014 ドイツ臨床味嗅覚学会 2014 年国際会議
公式ホームページ URL	http://www.uniklinikum-dresden.de/das-klinikum/kliniken-polikliniken-institute/hno/forschung/interdisziplinares-zentrum-fur-riechen-und-schmecken/neuigkeiten/kongresse/clinical-chemosensation-2014-1/clinical-chemosensation-2014
開 催 期 間	2014 年 11 月 21 日 ～ 2014 年 11 月 23 日
旅 行 期 間	2014 年 11 月 20 日 ～ 2014 年 11 月 25 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	MTZ, Fiedlerstrasse 42, D-01307 Dresden, Germany (ドイツ, ドレスデン, 医療理論センター)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	中野詩織 筑波大学大学院人間総合科学研究科 綾部早穂 筑波大学人間系
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Sequential context effects on odor pleasantness rating (ニオイの快不快における系列的文脈効果) ※申請時と発表題目に変更がありました
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、Clinical Chemosensation 2014 への参加に当たりまして、国際会議等参加費補助金を助成いただきましたことを、心より感謝申し上げます。以下に、自身の研究発表を含む本学会での活動内容および、本学会への参加により得られた成果について報告いたします。

【活動内容】

ドレスデンのカール・グスタフ・カールス大学において開催された Clinical Chemosensation 2014 へ参加し、“Sequential context effects on odor pleasantness rating” の題目でポスター発表を行った。本学会は、世界的に著名な味嗅覚研究者である、当大学の Thomas Hummel 教授により例年開催されているものである。その名が示す様に、臨床における味嗅覚研究の発表が中心的であったが、人におけるニオイや味の知覚や認知について、行動や脳活動を指標として検討した心理学的研究も多くを占めていた。発表者はいずれも世界的に活躍している味嗅覚研究者であり、参加者数は小規模ながらも、またそれ故に、研究者間の交流も含めて内容の濃い充実した会であった。

【成果】

申請者の発表は、嗅覚刺激に対する感情価の評価における hedonic contrast（現在評価する刺激に対する感情価が、時間的に先行評価した刺激の感情価とは反対方向へ過大に評価される現象）を検討した、一連の実験結果を報告したものであった。ポスターセッションは1時間程度と短かったが、多くの参加者と話すことができた。本発表のオリジナリティは、hedonic contrast 現象が、従来検討が多かった視覚刺激の場合には対称的に生起するのに対して、嗅覚刺激の場合には、不快な刺激が先行した場合に、後続刺激の感情価が快に過大評価される方向への対比が起きないという非対称性を示した点であった。この点については、心理学を専門とする研究者だけでなく、臨床医の参加者にも興味を持たれた。耳鼻咽喉科の医師からは、嗅覚疾病患者に対して嗅覚能力検査を実施する場合があるため、人が系列的にニオイの強さや感情価を評価する際の評価順序による影響を考慮することが方法論的に重要であるという意見があった。セッションを通して自身の研究知見が他の専門分野にも波及する可能性を実感でき、今後の研究活動に対する意欲が更に高まった。

会期の3日間に行われた口頭発表では、味嗅覚の知覚と脳機能との関連性について、臨床研究や感覚知覚心理学の観点から検討した研究発表が多く行われた。特に、嗅覚トレーニングによる個人の嗅覚能力の向上とそれに伴う器質的変化を示す演題が多かった。嗅覚刺激を1日2回嗅ぐというトレーニングプログラムを数週間から数ヶ月に渡って実施した結果、トレーニングで嗅いでいたものとは異なるニオイに対しても嗅覚感度が上昇したことに加えて、初期嗅覚野である嗅球という脳部位も大きくなることが示された。他の感覚に比べてニオイの知覚は、経験による学習に大きく依存することが特徴であるが、上記の知見は、接触経験によるニオイ知覚の可塑性を示すとともに、知覚の変容が皮質的側面からも支持されたことを示唆しており、今後の嗅覚研究を発展させる重要な知見であると言える。会期後には、幸運にも Hummel 教授の研究室を見学する機会に恵まれ、教授自ら案内して下さった。研究室内には、ニオイや味の提示が精密に制御できる装置をはじめ、味嗅覚研究に必要な機器や場所が豊富に配備されており、また世界中から院生や研究者を迎えて活発に研究活動を行っている様子を伺い知ることができた。世界トップクラスの研究成果が生み出されている現場を肌で実感することもでき、今回の学会参加を通して貴重な経験が数多く得られた。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 9 月 20 日

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 中央大学大学院文学研究科

氏 名 飯村 周平



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 28th Conference of the European Society of Health Psychology ヨーロッパ健康心理学会第 28 回大会
公式ホームページ URL	http://www.ehps2014.com
開 催 期 間	2014 年 8 月 26 日 ～ 2014 年 8 月 30 日
旅 行 期 間	2014 年 8 月 25 日 ～ 2014 年 8 月 31 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	University of Innsbruck, Innsbruck, Austria (インスブルック大学・インスブルック・オーストリア)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	飯村 周平 中央大学大学院文学研究科
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Stress-Related Growth Model in Japanese Junior High School Students Facing an Entrance Examination 高校受験における日本人中学生のストレス関連成長モデル
補 助 金 額	80,000 円 (内訳：航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【学会概要】

この度、参加した大会は、28th Conference of the European Health Psychology Society（ヨーロッパ健康心理学会第28回大会）でした。開催地は、過去に2度、冬季オリンピックが開催された Innsbruck（Austria）です。Innsbruck は、ヨーロッパの有名な避暑地であり、8月という季節柄、街は観光客で賑わっていました。そのような中、Innsbruck 大学を会場とし、“Beyond prevention and intervention: increasing well-being” を大会テーマとした健康心理学の会議は行われました。ヨーロッパの国々を中心に、世界各地から健康心理学の専門家が集いました。

【成果】

1. ポスター発表

ポスターセッションの時間は2時間程度であり、研究領域のグループごとに発表が行われました。なお、報告者は Stress & Coping のグループでの発表でした。本研究のテーマは、「受験ストレスをきっかけとした中学生のストレス関連成長」に関するものです。受験制度は、国々により事情が異なるため、発表では日本特有の問題を丁寧に説明するよう心がけました。その上で、高校受験は我が国の中学生にとって、大きなストレスとなっていることを説明し、そのストレスを生徒の成長に結びつけていく必要性を、統計学的分析に基づき提起しました。この主張については、他の研究者から概ね同意を得られたと実感しております。その一方で、受験に関連するストレスは、日本特有の文脈で生じる教育課題でもあることから、日本国内において研究成果を示していく必要性も感じました。

2. シンポジウムの参加

いくつかのシンポジウムに参加しましたが、ここではその中でもとりわけ印象深かった発表について報告させていただきます。それは、健康状態のアセスメント方法の見直しに関するものです。具体的には、ノンパラメトリックな項目反応理論である Mokken 法を利用しようというものでした。一つの尺度に含まれる項目群は、それぞれ回答における困難度が異なる場合もあり、ゆえに各項目の困難度を考慮した得点化が必要になります。項目反応理論を利用すれば、この問題を解決することが可能なようです。

【付記】

この度は、国際会議の参加に係る費用のご支援をいただき、誠にありがとうございました。末筆ではございますが、日本心理学会事務局の皆様、学会員の皆様、本研究に貴重なご助言をいただきました中央大学 都筑学ゼミの皆様、若手健康・スポーツ・臨床心理学研究会の皆様には、この場をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015 年 3 月 30 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院人文社会系研究科
修士 1 年

氏 名 二木 望



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology 第 16 回 SPSP 大会
公式ホームページ URL	http://spspmeeting.org/2015/General-Info.aspx
開 催 期 間	2015 年 2 月 26 日 ～ 2015 年 2 月 28 日
旅 行 期 間	2015 年 2 月 25 日 ～ 2015 年 3 月 2 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The USA, Long Beach, Long Beach Convention and Entertainment Center アメリカ・ロングビーチ・ロングビーチコンベンション&エンターテイメントセンター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	二木望 ¹ ・渡辺匠 ^{1,2} ・櫻井良祐 ¹ ・唐沢かおり ¹ ¹ 東京大学大学院人文社会系研究科 ² 日本学術振興会
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Entitativity and ageism: When do we help or neglect elderly people? 実体性とエイジズム：私たちはいつ高齢者を助け、無視するのか
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 航空券代 89,710 円の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology への参加に当たりまして、日本心理学会より国際会議等参加費補助金をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。以下で、学会での活動内容などに関して報告させていただきます。

【活動内容】

2015年2月25日から3月2日にかけて、“Entitativity and ageism: When do we help or neglect elderly people? (実体性とエイジズム：私たちはいつ高齢者を助け、無視するのか)”という題目でポスター発表を行うため、アメリカのロングビーチコンベンションセンターで開催された The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology に参加しました。開催日数は3日間で、初日(26日)はプレカンファレンスが開かれ、態度や社会的認知など社会心理学に関する29もの多岐にわたるテーマ別に分かれた発表が行われたほか、夜には大学院生のために GSC Social Night というイベントが開催されました。2日目と3日目にはポスター発表やシンポジウムなどが行われ、報告者は2日目にポスター発表を行いました。

【成果】

1. 自身の研究発表

発表内容は高齢者へのステレオタイプと、援助や無視といった高齢者への行動意図がどのような場合に関連をもつのかを明らかにするものでした。研究結果は、高齢者の実体性(どれほど「集団」として知覚されるかの程度)がステレオタイプと行動意図との間の関連性を規定することを示唆するものでした。具体的には、高齢者の実体性が高い場合には、彼らへの「温かい」というステレオタイプが積極的な援助意図を、「能力が低い」というステレオタイプが無視といった消極的な危害意図を引き起こした一方で、実体性が低い場合には、両者の間に関連がみられませんでした。

本発表は27日の午前8:00～9:30のポスターセッションにおいて行われました。報告者自身にとって今回が初めてのポスター発表であり、質問者の方からポスターに載っていない情報を求められたときに即座に対応できなかつたりするなど反省点もあり、今後より良い発表をするために今回の経験を活かしていく所存です。

2. 他の研究発表

初日のプレカンファレンスでは、Common-Sense Beliefs and Lay Theories をテーマとしたものに参加しました。また、2日目と3日目では自身の関心領域である地位や格差などをキーワードとしたポスター発表やシンポジウムを中心に見て回りました。特にシンポジウムではこのテーマに関する数多くの発表がなされており、議論の盛り上がりを感じると共に、生理学や経済学などを取り入れた発表も多く、関連する幅広い諸領域に関してより深い知識を得る重要性を感じました。しかしながら、発表自体に関しては大体の内容の理解はできたものの、質疑応答で交わされるスピードの速い英語での議論にはついていくことが出来ず、改めて今後の課題として語学力があることを痛感いたしました。

【最後に】

国際会議等参加費補助金を受理して下さったこと、重ねて御礼申し上げます。今回の経験を、今後に活かしていく所存です。本当にありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 8 月 1 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪体育大学大学院 スポーツ科学研究科
博士後期課程一年

氏 名

片上 絵梨子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	19 th Annual Congress of the European College of Sport Science ECSS Amsterdam 2014 第 19 回ヨーロッパスポーツ科学学会
公式ホームページ URL	http://www.ecss-congress.eu/2014/14/
開 催 期 間	2014 年 7 月 2 日 ～ 2014 年 7 月 5 日
旅 行 期 間	2014 年 6 月 28 日 ～ 2014 年 7 月 25 日 ※共同研究と情報収集を目的として、学会終了後に 2 週間英国に滞在した為
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	RAI Convention Centre, Amsterdam, Netherland (RAI コンベンションセンター、アムステルダム、オランダ)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	片上絵梨子 (大阪体育大学大学院) Neil Weston (University of Portsmouth) 土屋裕睦 (大阪体育大学大学院)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The examination of the impact of social support: A qualitative analysis of the reaction to verbal messages ソーシャルサポートの影響～他者の言語的発話に対する質的分析～
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 往復航空券代 ￥133,900 の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

貴学の国際会議旅費補助金を受け、2014年7月2日～5日にかけて、オランダのアムステルダムにて開催された The 19th Annual Congress of the European College of Sport Science にて、スポーツ心理学分野におけるポスター発表を行った。以下、補助金の使用状況、及び参加学会での活動内容とその成果を報告する。

【補助金の使用状況に関する報告】

補助を受けた 80,000 円は、往復航空券旅費 133,900 円(領収書添付)の一部として全額使用した。

今回発表を行った研究は University of Portsmouth の Neil Weston 教授（共同研究者 2 番目に記載）との共同研究で行われた。学会終了後にイギリスに滞在し、同教授との更なる共同研究に関する相談、情報収集を行った。そのため、帰国日が学会終了日より 2 週間後となっている。

【報告者の発表】

報告者は【The examination of the impact of social support in sport: A qualitative analysis of the reaction to verbal messages (スポーツ場面におけるソーシャルサポートの影響～他者の言語的発言に対する質的分析～)】の題目でポスター発表を行った。スポーツ場面におけるアスリートのサポートに関する研究では、内容分析を用いた質的研究はイギリスをはじめとしたヨーロッパ諸国で多く行われている。そのヨーロッパの研究者が集まる今学会において研究発表、意見交換を出来たことは貴重な経験であった。特にソーシャルサポート研究が盛んな国の一つであるドイツの研究者から、質的研究で得られたデータを用いた質問紙作成の手続きに関する助言を頂き、大変有意義な時間となった。今学会で E-poster として発表を行った経験を活かし、来年度はより多くの研究者と意見交換が出来る口頭発表にて発表し、自身の研究の発展につなげることを目指す。

【得られた成果】

自身の発表以外では、7月2日に行われたアスリートのキャリアをテーマとした【FEPSAC symposium・Knowing what we want tomorrow in order to prepare for it today: Career development and transitions of talented, elite and retired athletes】に参加した。発表者として、FEPSAC 前会長の Peter Wylleman 氏や英国スターリン大学の David Lavellee 教授がヨーロッパのアスリートサポート体制の現状や今後の課題について発表を行った。日本でも、2014年2月国立科学スポーツセンターにてアスリートのキャリアに関する国際会議が開催され、コーチングを含めたアスリートのキャリアに関する今後の課題が議論されたように、選手のキャリアディベロップメントは我が国においても重要な課題の一つである。今回のシンポジウムでは、今後の日本のアスリートサポートに活かせる非常に貴重な情報を得ることが出来た。

学会終了後、日本スポーツ振興センターロンドン事務所 (Japan Sport Council London) やロンドン北部に位置するレスター州のラフバラ大学を訪問し、2012年ロンドン五輪の際に日本のオリンピック・パラリンピックチームの情報拠点となったロンドン事務所での活動内容を知ることができ、大変貴重な時間となった。

【付記】

この度は、The 19th Annual Congress of the European College of Sport Science へ参加するにあたりまして、日本心理学会より国際会議等参加旅費補助金を頂きましたことを心より感謝申し上げます。今回の国際学会参加を通じて得た成果を今後の研究に活かし、国際的に研究を進めてゆく所存です。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 5 月 24 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 関西大学大学院心理学研究科

氏 名 本元 小百合



□

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	International Convention of Psychological Science 2015 国際科学的心理学会議 2015
公式ホームページ URL	www.icps-2015.org
開 催 期 間	2015 年 3 月 12 日 ～ 2015 年 3 月 14 日
旅 行 期 間	2015 年 3 月 11 日 ～ 2015 年 3 月 15 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The Netherlands, Amsterdam, Beurs van Berlage オランダ, アムステルダム, ブールス・ファン・ベルラーヘ
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	本元小百合 ¹ ・菅村玄二 ² ¹ 関西大学大学院心理学研究科, ² 関西大学文学部
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	A Burden on Shoulders Influences a Sense of Responsibility: The Effect of Physical Weight on the Intention to Help 「肩の荷」の重さが責任感に影響する：物理的重量が援助に関する意思決定に 与える効果
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 交通費, 航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動報告】

2015年3月12日~14日にかけて、オランダ・アムステルダムにて開催された International Convention of Psychological Science 2015 (以下、ICPS2015) に参加した。報告者は、2015年3月13日の12:30~13:30に” A Burden on Shoulders Influences a Sense of Responsibility: The Effect of Physical Weight on the Intention to Help (「肩の荷」の重さが責任感に影響する：物理的重量が援助に関する意思決定に与える効果)”という題目でポスター発表を行った。ポスター発表を行う前日やポスター発表後には、講演やシンポジウム、他の参加者のポスター発表に参加し、自身の研究領域である身体化認知やその他の関連領域に関する知見を得た。

ICPS2015は、世界75か国から2000人以上の研究者たちが参加した Association for Psychological Science 主催による大規模な国際会議である。今回の大会は、神経科学、言語学、文化人類学、遺伝学、哲学など様々な研究領域による学際的な科学の統合を図ることを目的として開かれた。大会の最終日には、身体化認知 (embodied cognition) の領域に多大な影響を与えた言語学者である George Lakoff が基調講演に参加し、その最新の人間科学に関する彼の知見を拝聴することができた。

【成果】

1. 報告者の研究発表

報告者の発表内容は、「肩の荷」という言葉が「責任感」を表すというように、肩に重いものを背負うと援助に対する責任を感じ、援助行動を引き受けやすくなるかどうかを検証したものであった。実験の結果は、男性は肩に重いものを背負うと体力の要る援助行動を引き受けやすくなるというものであった。大会で身体化認知に関するシンポジウムが多くなされていたこともあり、身体化認知を専門としていない方も興味をもって報告者の発表に訪れてくださった。また、特に知覚の研究を専門にされている方が多く足を運んでくださり、交流を深めることができた。来てくださった多くの方が「非常に面白い実験結果だ」と評価して下さり、今後の研究への意欲も高まるポスターセッションだったといえる。また、ポスター発表以外の時間ではあったが、トロント大学の博士の学生と知り合いになり、その後も電子メールで意見交換を行うことができたため、有意義な経験となったといえる。

2. その他の研究発表

シンポジウムでは、身体化認知研究が社会心理学、神経科学など様々な領域から研究がなされ、非常に大きな盛り上がりを見せているテーマだということが分かった。また、近年は社会心理学領域で研究が盛んに進められているため、身体化認知研究の応用的側面が強いということが印象深い。ポスターセッションでは、不安や怒りなど感情抑制や自己制御に関する研究内容が多かった。このことから、セルフコントロール研究もまたホットなトピックであり、社会での応用が期待されていることを理解できた。今後の心理学の動向を考える上で非常に貴重な体験となったといえる。

【付記】

このたびは、International Convention of Psychological Science 2015 への参加に当たり、日本心理学会より助成金の支給対象者に採択されたことを心より深く感謝申し上げます。このような機会を頂けたことは、自分の中で本当に貴重な経験となりました。今回の学会参加によって得られた成果を、今後の研究活動にも活かしてまいりたいと思います。ありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015 年 4 月 8 日

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 関西大学大学院心理科学研究科
博士課程後期課程

氏 名

山本 佑実



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	International Convention of Psychological Science 2015 2015 年国際心理科学会議
公式ホームページ URL	www.icps-2015.org
開 催 期 間	2015 年 3 月 12 日 ～ 2015 年 3 月 14 日
旅 行 期 間	2015 年 3 月 11 日 ～ 2015 年 3 月 17 日 ※航空券確保の都合上、 期間を当初の 15 日から 17 日まで延長しました。
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Amsterdam, The Netherlands, Beurs van Berlage (オランダ、アムステルダム、ブルス・ファン・ベルラーヘ)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	山本 佑実 (関西大学心理科学研究科 認知・発達心理学専攻) 菅村 玄二 (関西大学文学部)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Physical Coldness Induces “Warm” Reactions: A Word-Incongruent Hypothesis* 物理的冷たさが「温かい」行為を促進する：単語不一致仮説* ※申請時より副題の変更がありました。 申請時の副題：A Preliminary Experiment of the Paradoxical Effect of Temperature
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 航空券 100,340 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

報告者は、2015年3月12日から14日にかけて、オランダ・アムステルダムのブルス・ファン・ベルラーヘで開催された International Convention of Psychological Science 2015（2015年国際心理科学会議；ICPS2015）に参加した。

【ポスター発表】

本研究では、物理的温かさ（冷たさ）が心理的に温かい（冷たい）行為を生むという温度感覚を用いた従来の身体化認知の研究に対し、人は物理的冷たさを感じたとき、物理的な冷たさ（水難事故）もしくは心理的な冷たさ（被疎外行為）で苦しむ他者に対して向社会的になりうるという、逆説的なプロセスが存在することを報告した。また、物理的冷たさを感じる条件下に限り、評定者の孤独感に応じて緊急場面での援助行動に対する意欲も高まるという結果も得られた。これらの成果は、温度感覚によって、温度に一致した概念が直接的に活性化されるプロセスと、親和欲求や孤独感の媒介に基づいた、温度刺激とは意味的に相反する概念が活性化されるプロセスとが存在することを示唆する。

以上の内容について、発表時間は1時間と短いながらも、関連領域の研究者から様々なご意見をいただいた。主に、たびたび重要視される研究の再現性に関連し、本研究のサンプルサイズが小さく、また、追試が行われていないという点についてであった。これに対し、追試の必要性を認めた上で、効果量の大きさや、概念的な追試を行っているなどの理由から、当該の現象を今後も検証していく旨を述べたが、概念的追試ではなく、是非、直接的追試を行うようにとのご指摘をいただいた。申請者にとって、今回が初めての国際発表であったが、直接的追試の必要性は重々感じつつも、これまでにこの点を指摘されることはなかった。追試を積極的に押し進められる土壌があることに、国際的な研究の場での、結果に対する誠実性を改めて感じる事ができた。また、報告者の研究領域に類似した研究が、欧米諸国に限らず、アジア圏でも積極的に行われていることから、語学力の向上は必須であることを再認識させられた。今後は、論文執筆に限らず、英語でのコミュニケーションについてもその技能を身に付けていく所存である。

【発表以外での大会への参加】

報告者は、自身の研究発表以外に、いくつかのシンポジウム、キーノート・セッションに参加した。研究者の専攻領域である身体化認知について積極的に取り上げてきたAPS主催の国際学会であり、また、開催国が温度感覚の研究が多くなされているオランダであったことから、温度研究の大家であるHans IJzerman教授のプレゼンテーションを順に巡る日程となった。氏のセッションでは、これまでに行われてきた10の温度研究から、物理的な温度感覚と、親和的な人間関係の維持、調節についての関連性を整理し、社会的温度調節という現象とそのメカニズムが提案された。これは、現在、報告者が取り組んでいる研究の中核となる考え方であり、自身の研究の方向性が他の研究者の知見によって裏付けられたと同時に、今後の研究の独自性、速報性について改めて考える機会となった。

【付記】

この度は、国際学会への参加にあたり、国際会議等参加旅費補助金の支給対象者としてご採択いただきましたことを、心より感謝申し上げます。今回の国際学会で得た知識、経験を活かし、その成果を公表すると共に、より一層、研究に励んでゆく所存です。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 9 月 10 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 琉球大学大学院医学研究科
精神病態医学講座 博士課程

氏 名 榎 木 宏 之



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	17th European Conference on Personality (第 17 回 パーソナリティに関するヨーロッパ会議)
公式ホームページ URL	http://www3.unil.ch/wpmu/ecp17/
開 催 期 間	2014 年 7 月 15 日 ～ 2014 年 7 月 19 日
旅 行 期 間	2014 年 7 月 13 日～2014 年 7 月 20 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	スイス, ローザンヌ市, ローザンヌ大学 the University of Lausanne, Lausanne, Switzerland
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	○榎木 宏之 ^{1) 2)} , 甲田 宗良 ¹⁾ , 斎藤 里菜 ¹⁾ , 小渡 敬 ²⁾ , 近藤 毅 ¹⁾ 1) 琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座 2) 平和病院
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Effects of attitudes towards ambiguity on subclinical depression and anxiety in healthy volunteers 健康者の曖昧さへの態度が抑うつ及び不安に与える影響
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動内容】

“Effects of attitudes towards ambiguity on subclinical depression and anxiety in healthy volunteers” というテーマで発表を行うため、17th European Conference on Personality に参加した。開催地は、スイスの Lausanne 大学、大会の会期は 7 月 15 日から 7 月 19 日の 4 日間であった。連日、キーノートレクチャーやミニシンポジウムが big five personality trait や神経科学とパーソナリティ等様々なテーマで行われていた。

参加者の顔ぶれを見ると、私のような極東からの研究者をはじめ、中近東、アフリカなど世界中から集まっており、本学会は、“European”と学会名を謳っているものの、実質的には国際学会の様相を呈していたように思えた。大会本部から参加者に提供された昼食では、連日パキスタン、ドイツ、ギリシャ、スペイン等からの参加者と相席をして交流を楽しむこともできた。

【成果】

1. 自身の研究発表

今回の発表は、7 月 18 日（金）のポスターセッションで行った。

本研究では、曖昧さへの態度の抑うつと不安に及ぼす影響を検討することを目的とした。対象者は 1019 名の健常者であり、3 つの尺度を用いて質問調査を行った。使用した尺度の 1 つは、曖昧さへの態度尺度 (Attitudes towards Ambiguity Scale: ATAS ; 西村, 2007) であった。今回は、1019 名を対象に事前に行った ATAS の再因子分析によって新たに得られた 4 因子 (Enjoyment, Anxiety, Exclusion, Noninterference) を使用した。ATAS4 因子を説明変数に、残りの 2 つの尺度の SDS と STAI-T 得点を目的変数に階層的重回帰分析を行った。その結果、SDS と STAI-T の両方に対して、Enjoyment は有意な負の影響力を、また、Anxiety は有意な正の影響力を持つ結果が認められた。曖昧さに関心を持ち楽しめることは、抑うつや不安を緩和し、反対に、曖昧さに不安を抱くことは抑うつや不安を強化することが示唆された。

発表時には、約 10 名の参加者と質疑応答をする機会があり、特に ATAS 尺度自体に関心を持ってもらえたスペインとオランダからの研究者からは、ATAS の英語版は無いのか質問を受けた。曖昧さに対する態度を世界共通に測定できる英語版 ATAS 尺度の必要性を痛感した。

2. 他の研究発表

参加者の多様性と同じように、発表テーマも多種多様であり、パーソナリティの病理に関する分野では、我が国でも以前から取り上げられていた Schizotype に関する研究発表が目立った。一方では、Virginia 大学の Brian A. Nosek 教授によるインターネットネットワークを駆使した共同研究システムである Open Science の紹介の講演もあり、伝統的なテーマから最新のものまで扱う欧米の心理学の懐の深さと進歩の速さを肌で感じる機会となった。

本学会に参加することで、我が国だけではなく、海外の研究者にも研究成果を発信して行くことの必要性を感じることができたのも、今回得られた大きな意義の一つであったと思う。

【付記】

この度は、国際学会参加に際して、貴重な補助金をいただきまして心より御礼を申し上げます。今回得られた多くの刺激を今後の研究に生かして、僅かながらでも心理学の発展に寄与できるよう精進して参ります。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 8 月 12 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士後期課程

氏 名 新井 雅



□
下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	36th Annual Conference of International School Psychology Association (ISPA) 国際学校心理学会第 36 回大会
公式ホームページ URL	http://ispakaunas2014.vdu.lt/index.php/ispa2014/ispa2014
開 催 期 間	2014 年 7 月 15 日 ～ 2014 年 7 月 18 日
旅 行 期 間	2014 年 7 月 14 日 ～ 2014 年 7 月 22 日 (航空券確保のため旅行期間が若干長く設定されている)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	リトアニア、カウナス、ヴィータウタス・マグヌス大学 (Lithuania, Kaunas, Vytautas Magnus University)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	新井 雅 (筑波大学大学院人間総合科学研究科) 庄司一子 (筑波大学人間系)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The effects of training college students to collaborate with teachers based on case assessment (事例へのアセスメントに基づいて教師と協働するための 教育訓練プログラムの効果検討ー大学生を対象にー)
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 航空券代 188,630 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動内容】

2014年7月15～18日にかけて、リトアニアのカウナスで開催された、36th Annual Conference of International School Psychology Association (ISPA)にてポスター発表を行った（※申請時に7月15～17日としたが、申請者による記載の誤りで、正しくは7月15～18日の期間であった）。申請者の発表日は7月17日であり、題目は「The effects of training college students to collaborate with teachers based on case assessment」であった。

【成果】

1. 自身の研究発表

スクールカウンセラー等の心理専門職にとって教師との協働は必須とされているが、そのための知識・技能を体系的に学ぶ教育訓練プログラムの構築が十分に行われていない。学校不適応事例への効果的な援助・改善を実現するためには職種間の協働が必須であり、その基盤としてアセスメントの共有（職種間で事例に関する情報交換や事例検討を行う作業）は非常に重要となる。本学会では、事例アセスメントの観点から、心理専門職が教師と協働的に事例に関与するための知識・技能を学ぶ教育訓練プログラムを試験的に作成し、大学生を対象に、その有用性と課題を検討した研究を発表した。具体的には、大学生22名を心理支援者役（11名）、教師役（11名）に分け、心理専門職が教師と協働的に事例検討するためのポイントの説明やロールプレイ実習を含めたプログラムを計3回実施した。その結果、心理支援者役の学生は、教師役と事例に関する情報交換を積極的に行うことで生徒理解が深まること、生徒のことを大切にすることだけでなく教師の立場や思いを尊重し、苦勞を労いながら教師と対話することで事例検討がスムーズに進むこと、できる限り具体的な援助の方針まで立てることの重要性を体験していることが示された。

ポスターセッションの時間、様々な研究者と交流し、相互の研究内容について話し合うことができた。本研究を海外の学校心理学分野に精通した研究者が集まる学会で発表できたことは、本研究内容を洗練させ、教師を中心とした他職種と効果的に協働するための心理専門職の養成・教育訓練のあり方を振り返るにあたり、貴重な機会となった。

2. 発表以外の大会への参加

本学会では、学校心理学関連の様々なシンポジウム、キーノート・プレゼンテーション、ワークショップ、ポスター発表が行われていた。申請者は、一例として、Establishing Psychological Consultation Services in School Psychology Practice と題したシンポジウムや、Professional Practices and Changing Role of School Psychologists と題したセッションなどに参加した。前者のシンポジウムでは、アイルランド、イスラエル、スウェーデンそれぞれのコンサルテーション・モデルの紹介がなされ、後者のセッションでは、イギリスにおける school psychologist や educational psychologist の訓練生の教育訓練プログラムの概要、手続き、訓練生の能力の評価方法などについて議論されていた。自身の研究との関連性も高く、貴重な経験・学びとなった。

【最後に】

このたびは、国際会議等参加旅費補助金をいただき、日本心理学会ならびに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。本発表を終えて特に感じられたのは、学会の雰囲気を楽しむことだけで満足するのではなく、海外で自身の研究発表を行うことや多様な研究者と積極的に交流することが研究活動においていかに重要かという点です。海外での学会発表は自分自身や世界の様々な研究者にとって重要な活動であることを自覚し、海外の研究者とコミュニケーションをとるための力を積極的に磨きながら、今後の研究活動につなげていきたいと考えます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 9 月 1 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東北大学大学院 学生

氏 名 小野間 統子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	28 th International Congress of Applied Psychology (第 28 回国際応用心理学会)
公式ホームページ URL	http://www.icap2014.com/
開 催 期 間	2014 年 7 月 8 日 ～ 2014 年 7 月 13 日
旅 行 期 間	2014 年 7 月 8 日 ～ 2014 年 7 月 13 日 (補助金申請書では、2014 年 7 月 9 日～2014 年 7 月 12 日と 記載しておりました。)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	France・Paris・Palais des Congr�s (フランス・パリ・パリコンベンションセンター)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	小野間 統子・湊本 潤・松本 彩和・坂井 信之 (東北大学文学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Psychological study on tipsy feeling after drinking a non-alcoholic beer. (ノンアルコールビール摂取後の酩酊感の心理学的検討)
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 航空券代 159,700 円として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

共同研究の代表者として ICAP2014 にて研究発表を行った。この経験より、英語でのプレゼンテーション能力、海外の研究者と議論する力を身につけることができた。研究内容の質の高さと、英語でプレゼンテーションやディスカッションをする力の両方が問われることを痛感した。

会場には開催期間中複数の液晶ディスプレイが設置されており、そこからあらかじめパワーポイントファイルで提出したポスターを検索、閲覧することができた。これらを活用したり、実際に発表会場へ足を運んだりすることによって、自身の修士論文に関連する応用心理学の研究分野から情報収集を行った。また、応用心理学だけでなく交通心理学や健康心理学など自身の研究分野に隣接する分野の研究者と議論を交わすことで、幅広い分野の知見を得ることができた。その際、各国の研究の背景や事情を直接聞くことで論文では明示されない詳しい部分まで知ることができた。

さらに、他の研究者の発表を聞くことで心理学の最新の研究動向を学ぶことができ、今後の研究活動へのモチベーションとなった。今回の会議に参加して得られた経験は、今後自分の研究を行う上で大きく役立つものと期待される。



研究発表の様子

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015 年 3 月 25 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院人文社会系研究科
修士課程 1 年

氏名 松本 龍児



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology 第 16 回 SPSP 大会
公式ホームページ URL	http://spspmeeting.org/2015/General-Info.aspx
開 催 期 間	2015 年 2 月 26 日 ～ 2015 年 2 月 28 日
旅 行 期 間	2015 年 2 月 25 日 ～ 2015 年 3 月 1 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The USA, Long Beach, Long Beach Convention and Entertainment Center アメリカ・ロングビーチ・ロングビーチコンベンション&エンターテイメントセンター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	松本龍児 ¹ ・櫻井良祐 ¹ ・渡辺匠 ^{1,2} ・唐沢かおり ¹ ¹ 東京大学 ² 日本学術振興会
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The effects of belief in free will on retaliatory aggression 自由意志信念が報復としての攻撃に与える影響
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 交通費と宿泊代の一部に使用)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

貴学会の国際会議参加旅費補助金を受け、2015年2月26日から2月28日にわたって開催された The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology に参加し、研究発表を行った。以下に参加状況を報告する。

補助金の使用状況

補助を受けた 80,000 円は、羽田空港からロサンゼルス空港までの航空券代、および現地での交通費と宿泊費の一部として全額使用した。

大会概要

本大会は社会心理学を中心とした大規模な国際学会であり、例年世界中から関連領域の研究者が数多く参加する。申請者にとっては、これが初の国際学会への参加となった。

第一日目には、専門領域ごとに各会場に分かれ、それぞれの会場で講演とポスター発表が行われる Pre-conference が行われた。二日目、三日目には大会全体で朝から夜まで数多くの講演とポスター発表が行われた。

申請者の活動状況

第一日目には、“Common-sense beliefs and lay theories”と題された Pre-conference に参加した。当 Pre-conference では、一般の人々が持つ素朴な信念に関する研究を行っている各国の研究者による講演が行われた。研究トピックは、アイデンティティ、公正感、道徳性、予知能力、自由意志、二元論など多岐にわたり、いずれの講演も非常に興味深い研究結果を示していた。また、昼休みには poster session が設けられ、ここで申請者も自由意志信念に関する研究結果を発表した。本発表において、同じく自由意志信念の研究を行ってきた研究者と議論を行い、その方が現在論文化を進めている未公開の研究成果についてお話を伺うこともできた。夕方、Pre-conference が終わると引き続き、本大会の poster session が開かれた。この poster session においても、申請者はポスター発表を行い、複数の研究者から研究内容について、さまざまなコメントをいただくことができた。また、直接お会いすることはできなかったが、自由意志信念に関する研究で著名な研究者から後日メールでコンタクトを取っていただくこともでき、本大会での発表は申請者にとって、とても有意義なものとなった。

第二日目、第三日目の講演では、申請者の研究分野の第一線で活躍する先生方による最新の研究動向をいくつも聞く機会に恵まれ、これもまた非常に貴重な経験となった。Poster session においては、数は多くなかったものの、申請者と同じく自由意志信念に関する研究発表を行っている海外の研究者と議論を行うこともできた。また、自由意志信念研究と関連する Morality や Self-regulation を扱った発表数は非常に多く、未公開のデータを含め、世界で現在行われている最新の研究動向を知ることができた。さらに、本学会の Graduate Student Committee が企画した Mentoring Match-Up Program に参加することで、自身の研究についてアメリカの博士課程の学生と直接相談をし、フィードバックを受けることができた。

また、会期中には、GSC Social Night や Diversity and Climate Committee Reception という交流イベントに参加したり、さまざまな大学の先生方や学生と夕食を共にしたりすることで親睦を深める機会も得られた。

今後もこのような機会を積極的に活用し、国際的に通用する研究成果を発表していけるように研鑽を重ねたい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015 年 3 月 31 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 広島大学大学院 教育学研究科

博士課程後期 1 年

氏 名

中里 直樹



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (パーソナリティ & 社会心理学会 第 16 回年次大会)
公式ホームページ URL	http://spsmeeting.org/2015/General-Info.aspx
開 催 期 間	2015 年 2 月 26 日 ～ 2015 年 2 月 28 日
旅 行 期 間	2015 年 2 月 24 日 ～ 2015 年 2 月 28 日 *申請時と変更がありました (前指導教授の退職記念式典に参加するため)。
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	U.S., Long Beach, California, Long Beach Convention & Entertainment Center (アメリカ合衆国・ロングビーチ, カリフォルニア・ ロングビーチ会議場)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	中里直樹・中島健一郎・森永康子 (広島大学大学院教育学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Effect of Sense of Freedom on Well-being Across Countries: A Cross-National Study Using the World Values Survey Data Sets (自由選択の感覚が Well-being に及ぼす影響 : 世界価値観調査データを用いた国際比較研究) *申請時と変更がありました。
補 助 金 額	8 万円 (内訳 航空費 164,450 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動内容】

アメリカ合衆国，ロングビーチで開催された The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology に参加し，ポスター発表をおこなった。現地時間の 2 月 24 日にロングビーチに到着し，26 日の 19:00~20:30 に発表を行い，翌日 0:05 の便で日本に帰国した。そのため，開催期間中の一日のみの学会参加となったことは残念であった（前指導教授の退職記念式典に参加する必要があったため）。しかし，その一日は，朝 8:15~16:30 のプリ・カンファレンスへの参加を皮切りに，自身の発表での質疑応答を積極的にこなすなど充実したものであった。発表の二日前に現地入りした理由は，体調を万全に整え，頭を英語モードに切り替えるためであった。また，前日は，発表の準備にほぼ一日を充てた。これらの結果，概ね満足 of いく発表が出来たと思う。

【成果】

(1) 自身の研究発表

“Effect of Sense of Freedom on Well-being Across Countries: A Cross-National Study Using the World Values Survey Data Sets”との題目でポスター発表をおこなった。発表では，近年注目を集める自由選択の感覚 (e.g., Inglehart et al., 2008) が well-being に及ぼす影響についての国際比較を，World Values Survey のデータを用いて示した。一時間半の発表時間中に多くの研究者がポスターを見に来てくださり，そのうち 7 人ほどの方に対しては研究の詳細についての説明と質疑応答をおこなった（1 名につき 10 分程度）。ほぼ全員が日本以外の研究者であり，海外の研究者を中心に自身の研究の詳細を伝え討論できたことは良い経験であった。ほぼ全員が，「①日本においてもアメリカにおいても，②時代を通して，③いくつかの予測因の中で，自由選択の感覚が well-being の最も重要な規定因の一つである」との研究内容について強い関心を示してくれたことは大きな自信となった。また，今後の研究の発展について，自由選択の感覚に影響を与えているものは何か，日本において国レベルの自由選択の感覚が低いことへの介入方法などについてディスカッションできたことは非常に有益であった。各国における時代を通じた効果量を示すためのメタ分析を用いた分析手法も好評であった。英語での討論もほぼ問題なくこなせ，今後の国際発信への意欲がさらに高まった。

(2) 他の研究者の研究発表など

自身の発表前に Happiness and Well-being のプリ・カンファレンスに参加した。その中で数多くのセッションがあり，13 名の研究者から幸福感に関する様々な観点からの発表を聞いた。特に，Psychological Well-being の権威である Carol Ryff 先生の基調講演が聞けたこと，また同じく高名な Ken Sheldon 先生の発表が聞けたことは非常に有意義であった。Subjective Well-being と Psychological Well-being は長らく独自に発展して来たが，Sheldon 先生によると，Subjective Well-being には Psychological Well-being で提唱されているような行動・生き方が寄与するとのことであった。つまり，両概念の関連性について近年研究が進んでおり，結果変数としては Subjective Well-being の考え方に基づくものを用いるべきであり，結果変数となるものを広範で何でもありにするべきではないとの説明は非常に説得的で感銘を受けた。さらに，休憩時間に他の研究者の方に自身の研究発表の内容について説明したところ，将来的な共同研究の誘いを受けた。研究関心の近い研究者が集まるプリ・カンファレンス参加は非常に有意義であった。

【最後に】

今回の国際学会では，(1) 様々な国の研究者と接して，その意見・発表に耳を傾けることができたこと，(2) 自身の研究を海外の人々に知ってもらうことができたこと，(3) 将来的な共同研究の可能性も広がったこと，など大きな成果があったと言える。このような大きな成果が得られた国際学会への参加旅費補助金を与えてくださった日本心理学会，並びに選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2015 年 3 月 30 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

氏 名 橋本 剛明



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	16 th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology パーソナリティ・社会心理学会 第 16 回年次大会
公式ホームページ URL	http://spspmeeting.org
開 催 期 間	2015 年 2 月 26 日 ～ 2015 年 2 月 28 日
旅 行 期 間	2015 年 2 月 25 日 ～ 2015 年 3 月 2 日 (※申請時から変更あり)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Long Beach Convention and Entertainment Center, Long Beach, California, U.S.A. アメリカ合衆国カリフォルニア州ロングビーチ市, ロングビーチ・コンベンション・アンド・エンターテイメント・センター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	橋本 剛明 (東京大学大学院 人文社会系研究科) 唐沢 かおり (東京大学大学院 人文社会系研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	How perceived control and justice beliefs affect one's forgiveness toward an unjust other コントロール知覚と公正信念が不公正な他者への寛容に与える影響
補 助 金 額	80,000 円 (内訳 往復航空代金 108,430 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2015 年 2 月 26 日から 28 日にかけて米国カリフォルニア州ロングビーチで開催された、Society for Personality and Social Psychology (通称 SPSP) の第 16 回年次大会に参加し、研究発表を行なった。社会心理学領域では最大規模の大会ということで、米国内のみならず世界中から集まった研究者が一同に会する非常に活況な大会であった。自身は 2 大会ぶりの参加であったが、今回も、領域が持つ「熱」を肌で感じるとともに、その中で議論に関わることを通して、一研究者として強くエンパワーされることができたと感じる。いくつか印象に残った事柄を選び、以下に報告する。

【Preconference】 大会初日 (26 日) は、29 種類のサブ領域に分かれての Preconference が開催された。自身が参加した Justice & Morality のテーマのものは、領域を代表する 7 名の研究者によるトークの他に、数名の若手研究者が短い持ち時間の中で矢継ぎ早に研究報告を行なう Blitz Talks と、ポスターセッションにより構成された。霊長類研究をベースにした道徳性の進化の話でセッションの幕が上がったかと思えば、続いて幼児を対象とする発達に関する話や、宗教という観点からの話などが続き、最後に Roy Baumeister が、文化の中での道徳の役割などを交えて、今までの話題を全て包含せんというような Keynote Speech を提供するなど、Morality というテーマが持つ多層性を改めて浮き彫りとするような内容であった。全トーク終了後のポスターセッションでは、他の研究者と、ポスターはもとより、今しがた聴いたばかりの興味深いトークの数々について、ドリンクを酌み交わしながら早速の意見交換を行なった。

【Plenary Symposium】 26 日の夜に、総会講演として Cultivating the Relevance of Social Psychology for Science, Policy, and the Average Person というシンポジウムが催された。社会心理学の知見をいかに実社会に応用するかという視点で、政策策定や健康・医療分野、大衆向けの書籍の刊行などに実際に関わっている研究者が登壇し、各分野の中で社会心理学がどのように貢献しうるのかについて議論した。個人的印象として、米国内では各分野において、実際に「研究」から「応用」へのリンクが形成されている点で、日本国内に比べると社会心理学が実社会から少なくとも認知はされており、一定の地位を築いているように感じた。それでも当該の問題が提起されるということは、研究の重要性を社会にアピールするということが、学会を挙げて達成すべき課題として共有されていることを意味しており、その点に刺激を受けた。

【研究発表】 個人としては、28 日の午前中にポスター発表を行なった。不公正にふるまった個人の謝罪に対する人々の反応を検討した研究であり、状況に対して個人が持っているコントロール感の程度が、制裁や寛容といった反応を調整するという効果を実験的に明らかにした。立ち寄ってくださった研究者の方々と、より大きな枠組の中での当該研究の位置づけについてなど、幅広く議論を交わすことができた。また、他の研究発表を観て回る中で、同じように謝罪の効果をテーマとする研究について、発表者の方と情報交換することもできた。

以上の事項を中心に、本学会大会への参加を通して、自らの今後の研究にとって practical にも motivational にも大いに有益な経験を積むことができた。日本心理学会による此度の助成に、記して心より感謝申し上げる。